２０２４年１２月２９日　青戸教会　「博士たちのクリスマス」　高橋克樹牧師
聖書　イザヤ書６０章１～６節、マタイ福音書２章１～１２節

イエスがヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムにお生まれになったとき、占星術の学者たちは最初エルサレムにやって、『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです』と尋ねたのでした。占星術の学者と言うのは、天文学を研究していた人たちで、この時代、天文学は非常に高度な学問として発展していて、一般民衆の間に将来を予見するものとして広く普及していました。つまり、民衆が自分の不確定な将来を見極めるものとして安価な料金で占ってもらうことが流行していました。

なぜ占星術が流行していたのか。それは当時の時代が人々にとって暗黒の時代であったからです。当時、ユダヤ地方はローマ帝国から委任を受けてヘロデ王が統治していました。紀元前３７年から紀元後４年まで、このヘロデ王が統治をしていたのです。ヘロデ王は様々な税金を取り立ててローマ帝国のご機嫌を伺っていましたが、それだけでなく、ユダヤ人のユダヤ教に対する熱心さも良く熟知していたので、ユダヤ人の歓心を買うためエルサレム神殿の改築工事を行ったり、ユダヤ地方のインフラ整備を結構行った人物です。

けれども、それらの工事費はユダヤ人から取り立てた様々な税金で行ったもので、ヘロデ王自身は自分が統治しやすいようにするためのもので、為政者として立派な人物であったかと言うと、そのようなことはありませんでした。けれども、３節にあるように、先生塾の学者たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」の所在を聞いた話を聞いたヘロデ王は不安を抱いたのです。この不安は、自分に代わって真実なるユダヤ人の王となるイエスが誕生したという話を聞いて自分の地位が脅かされることに不安を抱いたと受け止められがちですが、先ほども申し上げたように、ヘロデ王はユダヤ人の歓心を買うための様々な施策を行っていましたから、将来ユダヤ人の王となる人物が生まれたと言っても、自分の統治の時代が既に４０年近く経過していますし、自分の子どもに後を継がせることも考えてはいなかったようです。

たとえ自分の妻であっても、子どもであっても自分の地位を脅かす可能性のある存在は容赦なく殺して排除していました。ですから、将来ユダヤ人の王となる人物が生まれたとしても、末に自分の統治期間は４０年近くも経過し、あと長くても４、５年で終わりを迎える自分の統治期間を見据えると、仮にその赤ん坊が王になるとしても、自分の統治が終了してから２０年くらい後の時代のことだと考えたと思います。

そもそも、イスラエルの預言者の一族であるような人物が、ユダヤ人の王となる存在が生まれたというのであれば、ヘロデ王も真実味を感じたでしょうけれども、たまたま巷で流行していた占星術の学者が将来ユダヤ人の王となる赤ん坊が生まれたと尋ねてきたからといって、真実相当性があるとは考えなかったでしょう。けれども、ヘロデ王も、エルサレムの人々も、その話を聞いて不安を抱いたのです。そこで、ヘロデ王は、民の祭司長や律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと調べさせたのです。この行動が意味して

いることは、この世的な王のことではなくて、イスラエルで古来から預言されていたメシアとしての救い主のことです。ヘロデは自分に代わってローマ帝国の支配が続く中で王位につく王様が生まれたとは考えていないのです。そうではなくて、イスラエルにおいて長く到来が待望されていたメシアがどこに生まれるのかと調べさせているのです。

イスラエルにおけるメシアの到来というものは、ダビデ王以降においては、イスラエルの人々の間では特に外敵の脅威にさらされる中で、イスラエルの民＝ユダヤ人がローマ帝国の支配において現実の生活で味わっている苦難や窮状を解決してくれる救世主の出現を待望していたのです。つまり、ダビデ王は自分の地位を脅かす王と言うよりは、ローマ帝国の支配を根本から覆す救世主が生まれたのではないかと考えたのです。

このように見てくると、ダビデ王は自分の地位が危うくされることに直接的に不安を抱いたのではなく、ローマ帝国の支配の桎梏からイスラエルの民を解放するというイスラエルの預言で言われてきたメシアが誕生したのではないかと考えて、ユダヤ教の専門家たちに調べさせたのです。占星術の学者たちがエルサレムに来て、ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と尋ねたことがきっかけになって、ダビデ王がイスラエルの預言で言及されている救い主＝メシアが誕生したものと思い込んだことが、ベツレヘムに神の子イエスがお生まれになった歴史的事実と結びつくことになったのです。

占星術の学者たちは、イスラエルの預言で言われてきたメシアについての知識はなかったはずです。ユダヤ人から見れば、占星術の学者たちは異邦人であり、イスラエルに対する神の救済の歴史についても無知であったはずです。けれども、マタイ福音書によれば、イスラ絵r の救済の歴史に造詣が全くなく、星の運行によって世の中の行く末を占う占星術の学者たちを用いて、神がヘロデ王やユダヤ人たちに救い主の誕生の福音を告げ知らせた歴史的な事実を心に留めたいと思うのです。

つまり、ここに主イエスがすべての人類に救いをもたらすメシア＝キリストであるという福音が示されているのです。生ける者すべてを救いへと招くために主イエスはこの世に来たり給うお方であることが、イスラエルの歴史とは何も関係のない占星術の学者たちによって、知らされたことで、ヘロデ王やエルサレムの民たちが、メシア到来の預言がクリスマスのときに実現したことに気づかされたのです。そして、神はヘロデ王やエルサレムの民たちの不安という非常に人間的な感情を用いることを通して、救い主イエス誕生の歴史的事実へと導いたのです。占星術の学者たちは、原語のマゴイが占星術者のことだということから、新共同訳からは「占星術の学者たち」と訳されるようになったのですが、以前の口語訳聖書では「博士たち」と訳されていました。博士たちは、自分たちが東方で見た星がこの地上に大きな変化をもたらすものであると理解してユダヤ地方に来たのです。そして、その星がユダヤ人の王となる赤ん坊の誕生を示すものだということを知ったのです。ですから、ユダヤ教の聖地であるエルサレムで尋ねたのです。けれども、その質問が主イエスの生命を危険にさらすという政治的な情勢は知る由もありませんでした。しかし、そのような博士たちの無頓着をも神は用いて救い主の誕生であるクリスマスをこの世にもたらしたのです。